

共に高め合う心豊かなたくましい子どもの育成

～学習内容の理解を深める体験活動の充実～

越前市大虫小学校

1 はじめに

社会構造等の変化が急速に進む中、これからの学校教育には、児童に知・徳・体のバランスのとれた資質・能力を育成することがより一層求められている。資質・能力を偏りなく育成していくにあたり、「学びに向かう力、人間性等」を育む観点からは、体験活動の充実が重要である。そのために、児童が自然の中で豊かな体験をしたり、文化芸術を体験して感性を高めたり、見学・聞き取りなどの調査活動等の主体的な体験をしたりできる機会を学校教育が積極的に設ける必要がある。

本校でもこれまで、生活科や総合的な学習の時間に地域のゲストティーチャーを招いて、農業体験をしたり地域の歴史や良さを知ったりする等の体験活動を数多く行ってきた。本年度は、教科の学習においても体験活動や専門家を講師に招いた授業を充実させるため、以下のような取り組みを行った。

2 主な取り組み

児童は、目にした絵画等から感じた形や色、イメージなどを基に、よさや美しさなどを感じ取ったり、自分なりの意味や価値をつくり出すことができる。より主体的に、対象のよさや美しさを感じ取ろうとしたり、友達と話し合ってみたり、見方や感じ方を深めたりすることができるようになるために本講座を受講した。



～県教育委員会芸術教育推進授業～

(日本画「落葉」の鑑賞授業)

実施日：6月20日(火)

対象学年：6年生

教科等：図画工作科「鑑賞」

講師等：県文化振興課

会場(本校多目的室)に到着するなり児童は、展示してある六曲一双の屏風の大きさに圧倒され驚きの声をあげていた。講師より、この作品が菱田春草といふ画家の描いた「落葉」であることの説明を受けた後、「落ち葉の中に入ってみたい」ということで、屏風を見て感じたことや描かれた季節・時間・場所を考え、そう考えた理由について発表し合った。大きな屏風を隅々までじっくり鑑賞し、霧がかかった様子や色とりどりの落



がある様子から秋の早朝と感じる児童が多かった。

その後、菱田春草の略歴（長野県飯田市出身、1874～1911、東京美術学校卒業、岡倉天心に師事等）と「落葉」（1909年作）を描いたときに春草は病気であったことを聞き、春草がどんな気持ちで「落葉」を描いたのか話し合った。

《児童のワークシートや発表より》

- はじめてこんな大きな屏風に描かれた絵を見ました。本当に森の中にいるようで感動しました。
- 霧が晴れようとしているところから、今は未来は見えないけれど、きっと続いていると春草は思っていると感じた。
- 明るい日の光が差し込んでいるところから、生きる意欲にあふれていると感じたけれど、悲しい気持ちで描いたと思うと言っている人もいたので、いろんな絵の見方があるんだなと思った。

同じ絵画を見ているのだが、様々なとらえ方の意見が出されたことで、見る人によって感じ方が違うことを児童は実感することができた。また、大きさを含め、より本物に近い形で有名な絵画を目にすることができたことに感動している児童も多かった。

本講座を受講したことにより、絵を描くことだけでなく、絵画鑑賞への意欲も高まり、以降の鑑賞の授業では、これまで以上に多様な意見が出るようになった。

児童は実物や本物を直接見たり触れたりすることで社会的事象を適切に把握し、具体的・実感的に捉えることができる。また、調べたことや実社会で働く人から聞いたことを基にして思考・判断することで表現する力が育つ。そのため、次のような社会科見学を行った。

～消防署見学～

実施日：10月10日（水）

対象学年：4年生

教科等：社会科「くらしを守る」

体験先：南越消防組合消防本部

4年生児童は、社会科「くらしを守る」の単元で、火事からくらしを守る仕事や活動について学習する。主な内容は、消防士の勤務時間や消防自動車の特徴、通信指令室の役割、地域の消防団の活動や避難場所などである。その中で、児童自身が学習問題をつくり、調べたり見学やインタビューをしたりして課題を解決しながら学習を進める活動も取り入れている。

消防署では、消防車を間近に見て、備えられている機能やポンプの仕組み、放水される水量について説明を聞いた。救急車の車内も見せていただき、救命器具の使い方を聞いた。通信指令室の見学では、地図が大きなモニターに映し出され、電話がかかってくる様子などを見ることができた。消防士の方から訓練や装備のこ



とだけでなく、現場での苦労やこれまでの体験についての話を聞くことや、学校の授業で疑問に思ったことを質問することもできた。

《児童の振り返りより》

- 消防署の電話番号が 119 番の理由など、教科書にのっていないことが分かってよかったです。
- 通信指令室には、大きなテレビがあって地図が出ていました。火事がおきたらすぐに場所を調べて出動できることが分かりました。
- 救急車には、いろいろな機械がのっていました。使うために、たくさん勉強や訓練をしていることが分かりました。



児童は、どの体験にも真剣な表情で取り組んでいた。学校に戻ってから、授業や体験活動で学んだことを新聞形式にまとめる学習を行った。教科書に書いてあることを書き写すだけでなく、体験や聞いたことを文章や絵でまとめたことで、より学習内容への理解が深まり、定着も図られていると感じた。また、実際に消防車や救急車を見たり、本物の消防士さんから話を聞いたりしたことは、学校での座学だけでは学ぶことのできない貴重な体験となった。

～スポーツウェア工場見学～

実施日：11月9日（金）

対象学年：3年生

教科等：社会科「工場の仕事」

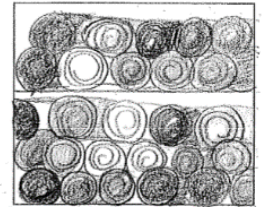
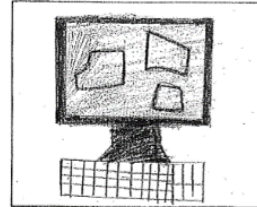
見学先：グリーンズ

3年生児童は、社会科「工場の仕事」の単元で、体操服ができる順序や、体操服を作るために使われている裁断機やミシン、働いている人の仕事の様子や工夫について学習する。体操服は、細かな各パーツにわかれており、それらを順々に縫い合わせることで完成していくこと、機械を使って、一度に多くの生地を型紙に沿って切ること、パーツごとにミシンの種類が違うことなどを見学するために地域の服飾工場を訪問した。また、働いている人に質問をすることができ、ポケットの高さをそろえるためにミシンに印をつけて仕事をしやすくしたり、裁断機を扱う時には手の置き方に気をつけて安全面に配慮したりすることなども学ぶことができた。



《児童の振り返りより》

- プロッターの右側にボールペンをつけて、色々なことをしていることが分かりました。プロッターは、設計図を高速でかいていることが分かりました。
- 体操服が出来上がったなら配送センターに保管されて、北は青森県、南は鹿児島県までトラックで運ばれていることが分かりました。
- 体操服を作るとき、全部ばらばらにして作って最後にくっつけることが分かりました。
- 生地には色々な種類がありました。全部で千五百種類もありました。大きな機械を使って、生地を切っていることが分かりました。



ぬの(生地)がいっぱいあった
 んばにたくさんありました。
 色は40と50しゅるいっんで
 ありました。

きかく室にキッドというパソコンの
 ような物がありました。キッドは体操
 服のたがひをつくって色々よ
 うな物をつくって色々よ
 サイズにしているそうです。

毎日着ている体操服が校区内の工場の機械で作られていく工程を見て児童は、大変驚いていた。日本の工業については5年生で学習するが、工場や工業製品への関心を高め、ラインにのって大量生産される仕組みについての理解を深める貴重な見学となった。また、事後学習として、学ばせていただいたことにふれながら、心のこもったお礼状を書けたことも、児童の表現する力の向上と地域との深い絆づくりのために役立った。

児童が自然の事物・事象について、「理科の見方・考え方」を働かせて、探究しながら学ぶことで、学習内容への理解を深め、「見方・考え方」をより豊かで確かなものにするため、校外での自然観察を行った。

～吉野瀬川の観察～

実施日：11月16日（金）
 対象学年：5年生
 教科等：理科「流れる水のはたらき」
 講師等：理科担当教員



5年生児童は、理科の「流れる水のはたらき」の単元で、流れる水によりカーブの外側の川岸が浸食され、内側には川原ができることを学習する。他にも、水量が増加すると川の流れが速くなるので浸食作用が大きくなり、災害を引き起こすことがあることなどを実験や資料をもとに学習する。学習したことを身近な自然や事象に結びつけ、学習への理解を深めるとともに防災への意識を高めるため、校区を流れる吉野瀬川の観察

を行った。吉野瀬川は、桜の名所として地域住民にとっても親しまれているが、台風等の大雨時には増水により避難勧告が出される河川でもある。そのため、川岸はコンクリートで固められ、流水の勢いを弱めるためのブロックも設置されており、観察に非常に適している。

《児童の観察記録より》

- ブロックは川の流れをおそくするためたくさん置いてあった。ブロックの周囲は流れが速かったが、内側は流れが遅かったです。
- ブロックのところに水がぶつかって、流れが遅くなりました。
- 川の外側は流れが少し速かった。流れの遅い内側には、川原が長く広がっていました。実験をしたときと同じようになっていました。
- 川の内側は流れが遅く、たい積のはたらきが大きいいため、川原ができていました。外側は流れが速く、浸食のはたらきが大きいため、堤防がコンクリートで固められていました。教科書の写真とよく似ていました。
- 川原には、少し大きい石があった。教科書で見たみたいに、角がとれて丸くなっている石が多かったです。



この観察を通して、川の内側に丸い石を多く含む川原があり、外側はコンクリートで固められていることに気付くことができた。また、川の真ん中に大きなブロックが置かれているにも気付くことができた。そして、教室で学習したことを基にしてそれらの理由を考えることで学習内容への理解を深めることができた。

自分が住む場所の近くを流れる川に学校での学習内容と同じ様子が実際に見られることや、自然が引き起こす災害を防ぐための護岸工事が行われていることを知り、学校での学習が生活に活かされていることを実感することができた。

家庭科では、グローバル化に対応して日本の生活文化の大切さに気付くようにするため、和食の基本となるだしの役割を学ぶ授業を行う。調理の専門家である本校調理員を講師として招き、協働して授業案を作成し、だしの役割について学ぶ授業を実施した。

～「だしの役割」を学ぶ授業～

実施日：11月21日（水）・30日（金）

対象学年：5年1組・2組

教科等：家庭科「食べて元気に～みそしるをつくってみよう～」

講師等：本校調理員

5年生児童は、家庭科の「食べて元気に」の単元で味噌汁づくりの調理実習を行う際、煮干しでだしをとる。だしのとり方や地域ごとのあるだしについて理解を深め、調理室で本校調理員を講師とした授業を行った。

まず、味には甘味・うま味・塩味・苦味・酸味という五つの基本味があること、昆布などの乾物や魚介類などの天然の食材から素材のうま味を引き出したものがだしであること、だしのうま味が美味しさの決め手であり人工の調味料ではつけられないこと等の説明を聞いた。次に、かつお節・煮干し・昆布・椎茸・本だしでとっただしっ味の見せ合い、感想を述べ合っただけで、お湯で溶いた味見をする様々なだしを加えて味見をする児童からは、「だしを加えるのと加えないで全然違う」等の声が多かった。



だしを体験してみよう！

	色	におい	あじ味	なにのだし？
赤	ひめいな きいろ	アムと した	かつおだし	かつお節
黄	にごり茶 とつめい	いいにおい	にぼし	にぼし
緑	とつめい	アムと する	こんぶ	こんぶ
青	うす茶色	しいたけ ほろ	しいたけ	しいたけ
白	にごり茶 とつめい	海のおい	本だし	本だし



《児童の振り返りより》

- だしをとる材料によって、味が全然違うことにびっくりしました。自然のものを使うことで、うま味が引き出されることがよく分かりました。
- しいたけでとっただしは苦手だったけど、昆布でとっただしと混ぜるとおいしくなりました。混ぜることによって味が深くなるということが分かりました。家でも教えてあげたいです。
- 初めて調理員さんと話ができて楽しかったです。色々な工夫をして給食を作ってくださいありがとうございます。
- だしをとる材料によって、味だけでなく、色やにおいが違いました。

お茶を入れる入れ物に、お湯と材料を入れるとだしがとれることが分かりました。意外に簡単にできるのだなと思いました。

この授業により、児童は、日本の伝統的な食文化であるだしについて、五感を通じて理解を深めることができた。さらに、味噌汁づくりの調理実習への意欲を高め、実際にだしをとる際、この授業を思い出しながら丁寧に作業をしていたことが印象的であった。また、子どもの学ぶ力の育成に向け、教職員が連携して取り組んだことは、「チーム大虫」の意識を高め、学校の活性化を促進した。さらに、調理の専門家である調理員と共同で指導案の作成を行ったことは、教員の専門性を高め、指導力の向上にもつながった。

3 成果と課題

どの活動においても児童は意欲が高く、生き生きと体験活動に取り組み、各教科の学習内容への理解を深め、定着も図ることができた。また、実物にふれる体験や専門性の高い講師による授業は、児童の知的好奇心を高めただけでなく、積極的に話し合いをしたり、分かりやすく新聞等にまとめたりする活動を進める要因となっていた。

今後は、体験活動の成果が最大限に発揮される時期や内容の検討を行い、教育課程の中に体験活動をより効果的・計画的に組み入れ、知識の習得と思考→体験→実感→定着の一連の学習の過程を確立していきたい。そして、児童が多様な人々と協働し学び合いながら、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手になることができるよう、社会に開かれた教育課程を念頭におき、学校全体で取り組んでいきたい。